育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ
― 総 括 報 告 ―

総括報告者　川井　尚[1)]
研究者　川井　尚[1)]，庄司　順一[1)]，横井　茂夫[2)]
若麻績佳樹[2)]，大藪　泰[3)]，前田　忠彦[3)]，恒次　欽也[4)]
森田　英雄[5)]，倉繁　隆信[5)]，川久保敬一[6)]，奥原　義保[7)]
吉田　弘道[8)]，David Shwalb[9)]，野尻　恵[10)]
大橋真理子[11)]，安藤　朗子[12)]

要　旨：育児における父親の役割を明らかにし、その知見を保健指導及び事後継続相談の実際に適用するために、初年度の本報告では、次のような研究課題を設定し、検討を行なった。

Ⅰ．父親の役割に関する実態調査項目の作成

Ⅱ．わが国における父親研究の動向－文献的考察－

Ⅲ．母親の養育態度及び育児不安に及ぼす父親の影響に関する研究

Ⅳ．発達段階と父親の役割に関する研究

Ⅴ．事例研究による父親の役割に関する研究

である。そして、本研究の最終目的に向けての基礎的な知見を得たので、ここにその概要を報告した。

見出し語：父親の役割、父親の母親への養育・育児への影響、父親と保健指導

１）日本総合愛育研究所・愛育相談所　２）都立母子保健院　３）早稲田大学　４）愛知教育大学
５）高知医科大学小児科　６）高知県中央保健所　７）高知医科大学情報センター
８）こどもの城小児保健部　９）光陵女子短期大学　１０）桜ケ丘記念病院
１１）東京都精神医学総合研究所　１２）東京都立教育研究所

研究目的：子どもの発達や心の健康にとって、父親は母親と同じように重要な役割を持っているという認識が、最近専門家の間にも芽生えてきている。本研究班は、その父親の役割とは何かを明らかにしながら、乳幼児健診での保健指導及び事後継続相談において父親にどのように対応し、父親がその役割を果たし得るかを目的に研究をすすめることとした。

この目的を達成するためには、大きく分けて次の２つの課題を解決しなくてはならない。

第１の課題は、最も基本的な問題、即ち父親の役割とは何かということであり、このことを明らかにすることによって初めて父親に関する保健指導の実際のポイントを示すことができるといえよう。即ち、保健指導の際に、父親をどのように相談のなかでとりあげ、いかにして育児において父親がその役割を果たすことができるのか、その具体的なマニュアルを最終的に作成したいと考える。

第２の課題は、保健指導、事後継続相談への父親参加のシステムを提起することである。それには第１の課題による知見を生かしながら、まず乳幼児健診の場でシュミレーションを行い、最終的にはそのモデルを提起したいと考えている。

１．父親の役割に関する実態調査項目の作成

恒次班員を中心にして、我々の従来の研究知見[1-5]を整理し、班全体の討議をかさね、９領域４７項目から成る調査票を作成した。その一部を記載すると、

＜領域１＞父親と子どもとの具体的な接触行動の程度。ex４ａ．日頃、お子さんの相手をすること（話したり、遊んだりするなど）をどのくらい積極的にしていますか。

＜領域２＞父親の育児観や父親観、父性観。ex５．お子さんに対して、どのような父親だと思いますか。いくつでも○をつけてください。

＜領域３＞父親自身の現在の精神状態、相談相手。ex１１．あなたの日頃の様子はいかがですか。当てはまる項目に○をつけてください。

２１．お子さんのことで困ったり心配・不安なとき相談できる人がいますか。

＜領域４＞子どもへの対応。ex２３．お子さんの精神的なことや心配な行動のことであなたが相談するとしたらどのような専門家や相談機関があればよいと思いますか。

＜領域５＞子どもの現在の状態。ex１７．お子さんの最近の様子についてお尋ねします。a)活発である b)生き生きしている c)疲れている～k)精神状態はよい i)身体状態はよい

＜領域６＞妻の養育態度や育児への自信。ex１４．奥様は育児・子育てに自信をもっていると思いますか。

＜領域７＞妻の心身状態。ex１１．奥様の日頃の様子はいかがですか。当てはまる項目に○をつけてください。

＜領域８＞夫婦の家庭観、夫婦関係。ex３２．結婚する前と今とを比べると奥様と家庭観や結婚観がずれてきたと思いますか。１０．次の書きかけの文章を見て、頭に浮かんだことをそのまま書いて文章を完成させてください。妻と私は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＜領域９＞乳幼児保健指導、育児相談等への参加。ex３６．育児・子育て教室が保健所・市町村保健センターなどで開設されるならば、あなたはそれに参加しますか。

この実態調査によって、父親の育児行動の実際的な側面と、その行動をとりやすい、或いはとりにくくしている要因とは何か、父親の家庭での心理的な態度や行動が母親や子どもにどのような影響を与えるのか、そして、父親の相談行動を生じさせる要因とは何か等、統計的分析を行い、父親の役割を明らかにしようとするものである。来年度は主として１歳半健診、３歳児健診の父親を対象にデータを収集する予定である。

２．わが国における父親研究の動向－過去２０年間の日本小児保健協会での研究発表の推移－

庄司班員らは、父親研究がわが国においていつ頃からどのように研究されてきているのか、特に実証的研究がどれほど行なわれているのかを、過去２０年間の日本小児保健学会での研究発表を通して検討した。それによると、最初の父親研究は1973年（Ｓ48）であり、７０年代は１大会で０～２題であった。初期は比較的実証的研究は乏しく、８０年代半ばから父親研究は増加し、１大会の発表数は多い年では１３、９２年まで平均７演題となっている（図１）。このことからみても、わが国における父親研究は黎明期であるといってよいであろう。

研究対象を見ると、初期は母親から見た父親の育児への協力、参加の程度を検討すものであり、次第に父親自身とそして父親と母親とを比較したり相互性を見るようになってきており、このことは研究方略の上で重要であろう。

研究方法は、アンケート調査が主流であり、その効果と限界を吟味し、面接法等をも用いると共に父親行動や父性意識の発達を縦断研究法により検討することも必要である。

そして、これらの研究の主たる知見は次のようであった。

父親の育児への参加は、全体としては概ね協力的であり、父親自身も楽しんでいることが多いが、一部に協力的でない例も見られる。父親の育児参加の内容については、子どもとの遊びと入浴が多いが、排泄の後始末や児が不機嫌なときの相手については母親に任せがちである。母親は、父親の精神的支持を強く求めている。

３．父親、母親の家庭観に関する研究－発達障害児との比較－

横井班員らは、健常幼児と障害幼児の父母を対象に家庭観を調査し、その比較のなかから父親の役割をつかむ手掛りを得ようとしている。

主たる知見を要約すると、離婚について「理由があれば離婚したほうがよい」と考えるのは、健常児の父親が最も有意に少ない。このことは、健常児の父親は家庭に満足していることの反映とも考えられる。しかし家庭生活にコミットした上でのことかどうか検討すべきものと考える。「何か心が充たされず淋しいと感じる」のは障害児の母親が他群と比べ有意に多く、心の相談・援助が必要であるし、障害児の父親のもつ精神的なサポート等の役割が重要であろう。また、障害児のいる家庭では、家庭の団欒をより大切

に考えており、健常児の家庭での個人生活優先の考えと異なっている。今後もこの比較研究を通して、父親の役割と明確にしたいと考える。

4．母親の育児不安に影響を及ぼす因子の検討

森田班員らは、3ヵ月から1歳半の子どもをもつ母親を対象にアンケート調査し、父親の育児への参加が母親の育児へどのように影響し、更に母親の育児不安を軽減する要因とは何かを検討した。その結果を要約すると。

①父親が育児に参加しているとした母親は、育児に参加しない父親よりも、育児に有意に自信を持っていることが認められた。一方、父親の育児への参加時間の長短は、育児への自信との関連が認められていない（図2）。このことから実際上は、臨機応変に手を貸してくれること、そして何より夫が育児に協力してくれているという実感が、母親の育児への自信をもたせているように考えられる。

②育児や子どものことについていつも父親と話し合う母親は、有意差をもって育児について自信をもっている（図3）。時として母親が一方的に話し、考えを押しつけ、その結果父親が馬耳東風で結局話し合いにならない場合も多い。互いに考えや気持ちを聞き合うという話し合いでなければ、このような結果はでないであろう。保健指導の際、母親に父親と話し合う際のコツを飲み込んでもらうことが必要であろう。

5．母親の養育態度に影響を及ぼす父親行動などの要因に関する研究

大藪班員らは、4ヵ月と10ヵ月健診を受診した母親を対象にアンケート調査を行い、母親の養育態度が良好であることにいかなる要因が関与しているのかを項目分析など統計的な検討を行なった。その結果、1．4ヵ月児の養育態度良好な母親では、①夫が育児に協力的であり、②夫婦関係がよく（夫が話をきいてくれる、精神的に支えになる、夫に満足）、③子どもが扱いやすい気質であり（泣き止ませやすい）、④冷静で辛抱強い人柄であるという特徴が得られた。2．一方、10ヵ月児の養育態度良好な母親は、①社会での仕事より子育てが重要であり、②夫以外に気楽に育児について相談をするネットワークを有し、③冷静で辛抱強い人柄という特徴をもっていた。

従って、4ヵ月児では父親が育児に協力的であると母親が認知すること、及び夫婦関係のよさが父親の役割の主たるものといえよう。10ヵ月児の母親では、父親は有意性をもって表面にあらわれないが共通している母親の「冷静で辛抱強い人柄」が、父親の要因と何らかの関連を有するものか、今後の検討課題である。

いずれにしても、児の月年令、発達段階によって父親の要因が、母親に、ひいては子どもに対し、顕在的にも潜在的にも、或いは異なった効果を及ぼすことが予想され、縦断的な研究が必要であると考えられた。

6．女子短大生の父親に関する回顧的役割研究

D.シュワーブ班員は、女子短大生の父親を対象に（60名）、表1に示すように各発達段階において父親としていかなる役割をもっていた

のかについて、アンケート法により回顧的な研究を行なった。その結果を要約すると、①接触時間の多いのは、乳幼児期であり、以後漸減する。②娘に対して最も責任を強く感じたのは、中学・高校時代である。③娘に対して最も影響を与えた頃は、ほぼ同率で、乳児期から高校時代にわたっている。④最も絆を強く感じたのは、幼児期と短大の現在である。⑤一般的に父親の役割が最も重要な時期は中学で、次いで幼児期、高校、短大である。

今回の調査では、責任や影響等その内容の分析にいたらず、今後この点を検討することにより、発達段階に特有な父親の役割を明らかにし得るものと考えられ、更に面接法による研究を行ないたい。また、父－息子関係における役割も研究課題である。

7．子どもの発達における父親の役割に関する研究

吉田班員らは、何らかの心理的問題を有する事例研究を通して、父親の役割とは何かを明らかにしようと試みた。この事例研究法の利点は通常、一般あるいは普通というものは幅が広く、そこからは本質を見いだすことが難しく、極端さや歪み、異常の中に基本的な本質が見えてくる、或いは本質が欠けていることから本質がかえってわかるともいえよう。

事例研究の対象は、小学１年から２９歳、男子１３人　女子１０人、問題は登校拒否を中心に諸習癖、摂食障害、境界人格等多岐にわたっている。

研究方法は、発症の主たる要因、母親側の要因、父親側の要因、治療転機と父親の変化について整理し、これに基づいて父親の役割とその役割が発揮される条件、及び父親が役割を発揮できるようその援助法について検討を加えた。その結果を要約すると、

１）子どもの発達における父親の役割として、①母親を支える役割、②子どもと関わり母親と違った目で子どもを見守り支える役割、③母子の共生関係に介入する役割、④子どものモデルとしての対象となること、および男性性・女性性の発達を助ける役割、の４つが抽出された。この４つの役割は、問題行動の発生、症状の発症と、問題行動及び症状の改善、に大きく影響していた。

２）父親の役割が発揮される条件の第一は、夫婦関係が良好であることである。母親を支える役割が機能していなかった１１事例のうち、夫婦関係が良好でなかったものが９事例あった。また、母子の共生関係に介入する役割を果たせていなかった５事例のうち３事例は夫婦関係が良好でなかった。第二は父親自身の発達の問題であり、これには母親を支える役割を果たすこと、子どものモデルとしての対象となること、および男性性や女性性の発達を支えたりすることの前提となる条件である。母親を支えるように変化することができなかった６事例のうち４事例に、父親自身の未熟さなどの発達不全とそれに関係していると考えられる対人関係の障害が認められた。また、子どものモデルの対象となることや、男性性や女性性の発達を助ける役割を果たせる方向に変化できなかった５事例のうち３事例に、父親自身の発達をめぐる問題が

認められた。

3）子どもと付き合える父親の能力。この条件は、子どもと関わり、母親と違った目で子どもを見守り支える役割に関係している。この能力は、かなりの父親が努力して態度を改善し、自分自身の対人関係上の障害をもちながらも子どもと付き合えるようになったことに注目される。

4）父親がその役割を発揮しうるよう援助する方法としては、以下のことが考えられる。

①父親に直接はたらきかける。父親が相談に参加しやすい条件を相談者側が整え、父親の参加を待って、父親に直接的にはたらきかける。

②母親を通して間接的に対応する。相談に参加している母親を通して、父親の子ども理解を深める対応である。この他に、母親が相談者との心理相談の過程を通して、母親自身の父親に対する見方の変化が生じることにより、父親が家庭のなかで立場を回復することもある。例えば、それまで役に立たないと見ていた父親を役に立つと見直すような場合である。

③子どもを通して間接的に対応する。これは、子どもが心理相談に通っていて、相談者との話し合いのなかで父親を巡る葛藤を処理するという、心の内界への対応を通して子どもが変化し、父親が機能しはじめることをいう。

今回は、父親に主たる焦点をあて検討を加えたが、今後、母－父－子の三者の相互性の分析を行い、父親のもつ役割を更に明確にしていきたい。

文献：

1）川井　尚ほか1990　育児における父親の役割に関する研究Ⅰ　厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（主任研究者　平山宗宏）平成元年度報告書

2）川井　尚ほか1991　育児における父親の役割に関する研究Ⅱ　厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（主任研究者　平山宗宏）平成二年度報告書

3）川井　尚ほか1992　育児における父親の役割に関する研究Ⅲ　厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（主任研究者　平山宗宏）平成三年度報告書

4）川井　尚　1992　育児における父親の役割　小児保健研究　51:(6),671-680

5）恒次欽也ほか　1991　育児における父親の役割に関する研究－障害をもつ子どもの父親の育児意識（その2）－　平成2年度厚生省心身障害研究高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（主任研究者　平山宗宏）厚省

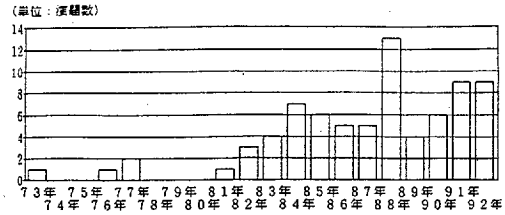
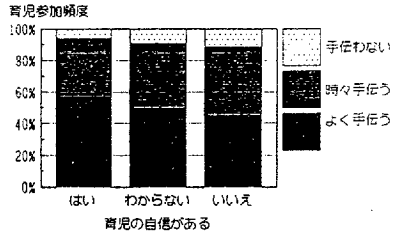


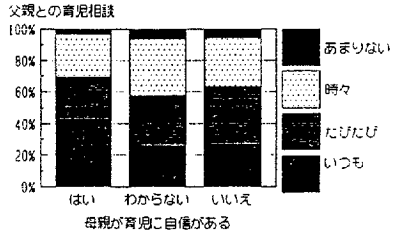
図1　「父親研究」の演題数の推移

図2：父親の育児参加頻度と育児の自信



P<0・01

図3：父親の育児相談と育児の自信



P<0・001

父親が選んだ親の発達段階：5つの質問による結果（%）

	乳児期	幼児期	小学校低学年	小学校高学年	中学校	高校	短大（現在）
最も長く時間を一緒に過ごした頃は	23	38	19	4	9	2	6
最も責任を強く感じた頃は	8	6	14	4	26	28	14
最も影響を与えた頃は	4	16	14	16	16	14	8
最も絆が強く感じた頃は	11	26	13	4	11	15	21
一般的には父親の役割が最も重要な頃は	11	17	11	11	26	13	13

平成４年度　研究題目一覧

１．父親の役割と保健指導に関する研究　Ｉ　－質問紙の作成－

恒次欽也、川井　尚、庄司順一、森田英雄、David Shwalb、大藪　泰、吉田弘道、横井茂夫、若麻績佳樹、安藤朗子、野尻　恵、大橋真理子

２．わが国における父親研究の動向　－過去２０年間の日本小児保健学会での研究発表の推移－

庄司順一、若麻績佳樹、川井　尚

３．父親、母親の家庭観に関する調査　－発達障害児との比較－

横井茂夫

４．母親の育児不安に影響を及ぼす因子の検討

森田英雄、倉繁隆信、川久保敬一、奥原義保、

５．母親の養育態度に影響を及ぼす父親行動などの要因に関する研究

大藪　泰、前田忠彦

６．女子短大生の父親に関する回顧的役割研究

David Shwalb

７．子どもの発達における父親の役割に関する研究　－事例研究を通して－

吉田弘道、野尻　恵、安藤朗子、大橋真理子

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要旨:育児における父親の役割を明らかにし、その知見を保健指導及び事後継続相談の実際に適用するために、初年度の本報告では、次のような研究課題を設定し、検討を行なった。

Ⅰ.父親の役割に関する実態調査項目の作成

Ⅱ.わが国における父親研究の動向－文献的考察－

Ⅲ.母親の養育態度及び育児不安に及ぼす父親の影響に関する研究

Ⅳ.発達段階と父親の役割に関する研究

Ⅴ.事例研究による父親の役割に関する研究

である。そして、本研究の最終目的に向けての基礎的な知見を得たので、ここにその概要を報告した。